

■ 原著 ■

乳 幼 児 と 絵 本

— イメージ形成に於ける役割 —

武 田 京 子*

(1988年1月20日受理)

Kyoko TAKEDA

The Effect of a Picturebook on the Imagination of Infants

乳幼児のイメージ形成の過程で絵本の果たす役割を明確にしようとした。絵本は文字を読みとる以上に絵を読む本である。絵を見、ことばを聞き、心の内なる世界を広げて行く役割を果たす。

しかし、対象年齢が下がるほど、読み手としてのおとなの役割が重要になり、知的世界を広げるのではなく、親と子が絵本を媒介にしてお互いの存在をたしかめ、信頼関係を形成するための役割が大きくなる。また、その信頼関係は、知的成長の基礎として欠くことのできないものである。さまざまな要因から育児態度が変容し、従来ならば無意識のうちに形成された親子の信頼関係が形成されにくくなっている。親が知的教育を目的に意識的に絵本を使用することが、絵本の持つ特性から無意識的に親子の信頼関係を形成する一助となっている。

〔キーワード〕 絵本、イメージ形成、読み手としてのおとな

1. はじめに

絵本は、一般的に「絵を主体とした児童向読物」と定義づけられ、「読書」の出発点にある本と考えられている。「読書」とは、本に書かれている文字を読み、書かれている意味や内容を理解し、表現されている情景を頭の中に思いうかべる作業である。絵本は、文字の読めない子どもに与えられるが、おとなと一緒に「見る」「読む」「語る」「話す」ことによって、はじめて「絵本」として

の意味が出てくるのであり、単に、子どものまわりに存在するだけでは、「モノ」にすぎないのである。

最近、絵本に対する関心が高まり、読者の範囲も0歳からおとなまでと広がりを見せている。ここでは、読書以前の絵本、つまり、文字読解力習得以前の乳幼児にとって、絵本がどんな役割を果たしているのか、特に、イメージ形成に於ける役割を明かにしようとするものである。

*岩手大学教育学部家政科

2. 乳幼児向絵本の現状

1 赤ちゃん絵本とは何か

赤ちゃんが乳児を示す場合には、1歳までの子どものことであるが、「赤ちゃん絵本」と呼ばれる絵本は各出版社によって年齢範囲が異っている。絵本に示されている年齢の目やすを見ると、「0歳から」「1歳半から」とまちまちであり、赤ちゃん絵本は、3歳位までの乳幼児を対象とし、はじめて絵本を見はじめる子どものために作られた絵本を示す名称と考えられる。

赤ちゃん絵本は内容から考えると「ものの絵本」と「ストーリーのある絵本」に大別することができる。前者は、身近な動物等を本物に近く、絵としての美しさを持って書かれたものが望ましい、図鑑に近いものを言う。後者は、一さつの本のはじめから終わりまでに筋のあるもの、内容は簡単で日常生活から素材を選んでいるもの。「くつつあるけの本」¹⁾等のシリーズがこれにあたる。外国のものには前者の範疇に名詞以外のことばの概念を表現したような、いわば「ことばの絵本」と呼ばれるようなものが含まれている。

一概に「赤ちゃん絵本」といっても、内容、対象範囲が広いので、与える子どもの興味や生活経験によって、与える側の選択眼が要求されると考えてよいだろう。

2 我が国の赤ちゃん絵本

1964年、オランダのグラフィックデザイナー、ブルーナーによって作られた『ちいさなうさこちゃん』²⁾のシリーズが翻訳出版された。この時が、我が国の赤ちゃん絵本を真剣に考える契機となった。勿論それまでに、乳幼児向きの絵本が皆無だったわけではないが、厚紙仕立てのけばけばしい色彩の絵本で、かわいい動物、おもちゃの自動車などがわざとかわいらしく描かれたり、昔話のダイジェスト版のいわゆる赤本絵本が主流であった。編集者や作家の中には、乳幼児のための良い絵本

を望むものはあったが、具体的な作品としては形をとってはいなかった。

ブルーナーの「うさこちゃん」は内容が乳幼児に適しているか、に疑問の余地があるにしても、『こどもがはじめてであらう絵本』というキャッチフレーズとキャラクターの描き方は、従来の赤ちゃん絵本とは違った印象を与えた。本の形は、一辺16.5センチの正方形、絵は省略された太い黒い線で輪かくをとり、使用されている色は、赤・青・黄・緑・白・黒の6色、平塗りで描かれ、登場する動物・人物は正面向きであるのが特徴である。

「福音館のうさこちゃんが売れている、だがあくまでうさこちゃんは外国のものだ、日本の赤ちゃんの絵本をつくろう。」という、「こぐまちゃん絵本」(1972)³⁾には直接の契機であったが、「松谷みよ子あかちゃんの本」(1967)⁴⁾、「いやだいやだの本」(1969)⁵⁾等も、何らかの影響をうけている。翻訳書の売れ行きを見て、乳児が絵本の読者対象であることを確信し、日本独自のものを作ろうとしたものである。たまたま自家用に作ったものが編集者の目にとまり出版される、自分の子育てのときに欲しいと思ったものを作る、日常生活の中からモチーフを選ぶなど⁶⁾、作者の親としての経験が生かされたこれらのシリーズは、「赤ちゃん絵本」というジャンルを確立し、評価を高めた。

3 乳幼児の発達と絵本

乳児がいつ頃から絵本に関心を持つのか、については、注意深い観察記録がいくつかあるが、個人差が大きく、一般的な月齢基準を定めることは出来ない。

新生児の視覚は、出生時には明確な像は結ばないが、あることは確かである。生後1ヶ月には、ものをジッと見つめるようになり、人の顔、人の顔を描いてある絵、お面を見つめ笑うようになる。自分から積極的に反応し、声をかけ、手をのばしたりするようになる。絵本がいつから乳児に与えられるか、単に「もの」として存在するのか、「絵

本」として意識して与えられるかによって、反応に違いはあるだろうが、佐々木の報告によれば、生後5ヶ月に「こねこのねる²⁾」の表紙に大声で話しかけたと言う。「日頃、自分にとって、とても大切なつながりをもったお母さん(人)の顔につながる何かをそこに見出したにちがいないのです。」⁷⁾子どもがまさに「はじめて絵本に出会う」ということは、絵本に触れたり、なめたり、かじったり、もてあそぶのではなく、絵本に描かれた絵そのものに意味を見出したときと言える。それは、絵に母親(人)の顔を連想させる何かを発見するだけでなく、過去に経験した何かを発見する場合もあるだろう。その驚きを伝達しようとする時、子どもの言おうとする内容を理解できる人の存在が必要になってくる。絵本を読む、または、読んでもらう以前にも絵本と子どもには、仲立ちをする人の存在が重要な意味を持つてくるのである。

4 育児意識の変化と絵本

1961年、アメリカ政府厚生教育福祉省の手によって、生後3ヶ月の乳児とその世話をする人の行動観察をし、日米の育児の違いを比較する試みが行われた。⁸⁾「相対的にみて、日本の母親は自分の子どもと一緒に過ごす時間が多く、子どもを抱いたり寝かしつけたりする回数が多く、言葉よりも肉体的な接触を重んじ……母親と子どもの相互作用は、日米で異っている。」と報告されている。1981年、日本青少年研究所は、同一方法で観察を行い比較を試みた。その結果、日本の育児方法は20年間に米国型へ変化しつつあり、それに伴って乳児にも変化が見られることがわかった。乳児を抱いて揺り動かしたり、遊ぶという行動は減少し、おしゃべりが増加した。乳児は甘え泣きやぐずり泣きが減少し、きげんの良い声が増加している。つまり、接触型無意識的コミュニケーションから、言語型意識的コミュニケーションへと変化したのである。それまで、赤ちゃんの泣き声につれて行動していた母親が、赤ちゃんから自立し、自分

の予定に合わせて世話をするアメリカ型に変化し、それにつれて、赤ちゃんもぐずり声が減りきげんのよい声を多く発するアメリカ型へ変化したといえる。

乳児向け絵本の出版増加は、絵本を読む、絵を仲立ちとして子どもに働きかけるという言語型意識的コミュニケーションの増加と関連していると考えられる。過去の母親たちが抱いたり、おんぶしたりしながら自然に口ずさんだ子守歌、あやしことばは減少し、距離を置いた意識的な話しかけの増加に伴って、子守歌、あやしことばの代用として絵本が使われるようになったのではなかろうか。

3. 乳幼児のイメージ形成

1 イメージとは何か

イメージを豊かにする、想像力を育てるために絵本の効用がいわれているが、はたして乳幼児のイメージ形成にどのような働きをしているのだろうか。

イメージという言葉は、日頃、深い意味を考えることなく使われている場合が多い。はっきりとした形でとらえられないもの、心の中に思い浮かべる主観的なものを示すことが多いが、「イメージが豊かである」という言葉の中には、イメージの存在を良いものとして評価していることが感じられる。

「イメージは、意識するしないにかかわらず形成され、蓄積され、運動し、変性し、他のイメージと関って分解したり、合成したりする。人間は、イメージタンクであり、人間の行動はイメージによってひきおこされる。つまり、人間生活の栄養源としてイメージが存在しているのである。」⁹⁾イメージは人間の心の内容であり、人間にとって欠くことのできないものであるといえる。

2 イメージ形成の過程

イメージがどのように人間の心の中で形成され

ていくのか、その過程を明確に把握することは困難である。イメージの表出方法の一つとして「ことば」があるが、ことばの発達について解説されたものの、「ことば」を「イメージ」に置きかえてみると非常にわかりやすくなる場合が多い。そこで、ことばの発達を基本に置いてイメージの形成過程を考察してみようと思う。

岡本夏木は、子どものことばの発達を考えると¹⁰⁾ことばに焦点化するのではなく、社会性、情動、認知、象徴機能、音声などの関係した領域の機能の不可分な総合から生まれてくると述べている。

人間は、生後約1年後、意味のある言葉を自分の意志で発するようになる。そのためには、子どもが自分の活動の中で音声とそれを意味するものを理解し結びつけることが必要である。外的な刺激として音声だけが与えられただけでは、子どもは無意味なオウム返しをするだけである。ここで、重要な存在として母親との関係が意味を持つてくる。(ここで、母親というのは生物学的意味ではなく、養育者としての意味で使用する。)ことばを発するようになる1年間に、子どもは母親を主とした人との関係を通して、自分の周囲の事象を理解し、文化をとり入れていく。これらの積み重ねがあってはじめて、意味のあることばを使えるようになるのである。

イメージの場合も同様に、外界からの直接的、間接的な刺激を子ども自身が取捨選択して自分のイメージとして蓄積し、自己の内なる世界をつくりあげていくのである。刺激が心の中にとり入れられ、その子なりの意味づけがされたときに定着するのである。「意味づけ」をする際には、身近なおとなが直接、間接に影響を与えているのは当然であろう。

エリクソンは、人格形成の出発点に基本的信頼を置いているが、イメージの形成にも基本的な信頼のおける母親が重大な役割を果たす。子どもは知覚や運動能力の発達によって、それまで外界の

刺激に対して受動的であったものが積極的に探索をはじめ関心をひろげていく。母親は、刺激の伝達・媒介をする役割だけでなく、安全基地として、つまり心のよりどころとしての役割を持ちはじめると。子どもの心が安定しているかどうか、身体発達に影響を与えるのと同様に、イメージ形成にも影響を与えるのである。そこでは、ことばだけでなく、動作、表情、場の雰囲気など非言語的なものが大きく影響することが考えられる。

3 イメージ形成と絵本の役割

絵本をイメージ形成に役立つ刺激の1つと考えるときどのような役割をはたすであろうか。色、形のある視覚的な刺激、ストーリーが書いてある文字刺激、読み手を通して伝えられる音声刺激がまず考えられる。しかし、それよりもっと深い意味を持ったものではなからうか。

絵本を読む＝絵本を楽しむということは、絵本の内容を理解できるのではなく、「絵本を読んでもらうことが楽しめる」ことを意味している。絵本を楽しむ前の段階として、読む人との信頼関係ができていくかが問題になってくるのである。その人に抱っこしてもらい、声をかけてもらうことができるか(好きか)どうかが必要になる。「安心して、落ちついて絵を見る」「おとなの語りかけることが聞ける」ことができはじめてイメージ形成としての絵本の役割を考える準備ができたといえるであろう。また、絵本を読んでもらうことは、何かをしながら絵本を読むことは困難であることからわかるように、子どもにとって「読み手を独占できる時間の確保」を意味している。

絵本を見ているとき、子どもの心の中にはどんな動きが生じているのか。描かれている絵の実物を知っている時と知らない時では、自ずと違いが生じてくる。知っている時には、読み手の語りかけを聞きながら過去の経験を思いおこす、という活動が行われる。絵を手がかりとして匂い、音、感触、動きを思いおこし、語りかけによって「こ

とば」と結びつけることが可能になる。これらの経験が積み重ねられると「ことば」だけで子どもはその物を思い浮かべることが可能になる。実物を知らない場合には、未知の刺激として出会い、くり返し読むことによって刺激は蓄積されて行く。後日、実物と出会ったとき、イメージが形成されていた場合には、はっきりと子どもの心に定着し、好みに合っていれば大きな感動を起こす。絵本に特有な読みである「くり返し読み」は、子どもの思考や記憶の未成熟な点を考えると必要なことと考えられる。子どもの生活経験を考へて、絵本に書かれている文章に付け加えをすることも許されるし、子どもと読み手の間に別の会話が発生することもある。文字を1つ1つ読みとり、文章化し、その世界を心の中に思い浮かべると、という読解力が発達する以前は、絵本の原文から離れた読みは許されるし、読解力が発達した後も絵本から様々な活動が発展する可能性を含んでいるものなのである。文章の助けなしに絵を見ていくことだけで筋が理解できると同様に、様々な活動を発展させる可能性を含んでいることも良い絵本の条件であり、イメージ源としての役割をはたしているといえる。

4. イメージを豊かにする絵本とは何か

—むすびにかえて—

乳幼児のための絵本が我が国で出版されるようになって約20年が経過した。それで育った世代が、あと数年もすれば親になり、自分の子どものための絵本選びをするようになるだろう。

絵本の出版数は多く、乳児向け絵本のリストを作るのさえもむずかしい位である。その数を見るとき、限られた期間にどの位の数の絵本を見ることができるのか、見ないと何か後遺性が残るのだろうか、という疑問がでてくる。良い絵本が無い時代であっても、人間はイメージ形成をし、ちゃんと成長していたのである。最近ではイメージの豊か

な子どもが目立つか、といえばそんなこともないし、昔の子どもは想像力が乏しかったか、といえばそうでもないのである。

子どもは絵本に限らず、いろいろなものから刺激を受け、心を育てて来たのである。その基礎には人間としての信頼関係があり、無意識的に子どもの心にふれたものを大人が確認し、強化し、子どもに返していく、という一連の流れのある活動があったのである。現代では、育児も意識的に理性的に行えるようになってきている。子どもの数は少なくなり、経済的余裕もある。「子どものために良いことを」と考えるとき、意識してものごとを選択できる時代では、その意識が先行してしまう傾向が強い。「良い絵本を厳選して与えたらイメージの豊かな子どもになる」のなら、簡単であるが、そのように選んで与えても、子どもが見向きもしないことがある。イメージの豊かな子にするには、子どもとおとなが一緒になって、イメージを豊かにするものを探さなければならぬのである。

子どものための良い絵本の条件は、著名な絵本研究家¹¹⁾が述べているのでここでは触れない。その子に適したイメージ源は、たくさんの刺激の中からその子自身が選びとるであろう。そして、その子に適した絵本は、たくさんの絵本棚から、おとなと子どもが一生懸命探しさなければならぬ。探す過程の中でもきっと、たくさんのイメージ形成が行われるだろう。

参 考 文 献

- 1) 「くつつあるけのほん」全4冊
林明子作・絵（福音館書店）
- 2) 「子どもがはじめてであうえほん」全40冊
ディック・ブルーナ絵・文 石井桃子訳、松岡享子訳（福音館書店）
- 3) 「こぐまちゃんえほん」1～4集
わかやまけん作・絵（こぐま社）
- 4) 「松谷みよ子・あかちゃんのほん」全9冊
松谷みよ子文、瀬川康男、東光寺啓、岩崎ちひろ

- 絵（童心社）
- 5) 「いやだいやだの絵本」全4冊
せなけいこ作・絵（福音館書店）
 - 6) 「わたしのつくった赤ちゃん絵本」
松谷みよ子，わかやまけん，せなけいこ
『月刊絵本』10月号，1974（すばる書房盛光社）
 - 7) 佐々木宏子『絵本と想像性——三歳まえの子ども
にとって絵本とは何か』高文堂出版社（1974）
 - 8) 「変わってきた赤ちゃん——三か月児の日米比較
<1>～<10>」読売新聞1981.10.1～10.12
 - 9) 藤岡喜愛『イメージと人間』日本放送出版協会
（1977）
 - 10) 岡本夏木『子どもとことば』岩波書店（1982）
 - 11) 松居直，松岡享子，松隈玲子，中村悦子，瀬田貞
二氏らがそれぞれの著書の中で条件を掲げている。